



地域居住福祉施設群の建築設計に関する実践的研究 —ごちゃませ理念に基づく地域コミュニティ再生プロジェクトShare金沢・B's行善寺・輪島カブーレの事例から—

西川, 英治

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

2020-03-05

(Date of Publication)

2021-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3385号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003385>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 3)

論文内容の要旨

氏名 西川英治

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

地域居住福祉施設群の建築設計に関する実践的研究
—ごちゃまぜ理念に基づく地域コミュニティ再生プロジェクト
Share 金沢・B's 行善寺・輪島カプーレの事例から—

本研究は「ごちゃまぜ」の実現を推進する社会福祉法人の地域再生プロジェクトに設計者として携わった経験を基に、「ごちゃまぜ」を促す建築手法を設計論としてまとめたものである。

筆者は2011年以來「ごちゃまぜ」理念の基、地域コミュニティ再生を目指した三つのプロジェクトに設計者として携わってきた。これらのプロジェクトの建築設計論及び社会的・歴史的意義を当事者である設計者自身が、出来るだけ客観的立場で学術的論文に近い形でまとめ世に問うことに意義があると考え本論文を提出した。山崎寿一が設計科学論において論ずるように本来建築の設計や計画分野における論文は、事象の客観的把握・探求・事実命題の解明が目的ではなく、オリジナリティ・当為・課題・価値の内容に重みがあると考え、本論を展開した。

「はじめに」では本論の目的・位置づけを述べている。これらのプロジェクトには三つの共通した特徴がある。一つめは「ごちゃまぜ」という言葉を施設・運営理念としていることである。この言葉には否定的な意味合いが含まれているが、そうした誤解が生じやすい言葉をあえて使い、施設・運営理念を分かりやすく現したものである。二つめは、従来縦割りの福祉政策が推進されてきた日本において困難であった福祉横断的な様々な施設群の配置・構成が実現していることである。三つめは、障がい者と健常者の交流のみならず、地域社会全体の多主体・多世代交流を図る「地域コミュニティ再生プロジェクト」と位置付けられることである。

この三つの特徴は日本において他に類を見ないものであり、設計者として「ごちゃまぜ」を促す設計手法を明らかにし、プロジェクト推進の過程で得た知見を公式に残すことの意味は大きいと考えた。実務者および研究者にとって今後の日本社会のあり方を考える事例のひとつとして参考になれば幸いと考え、理論化に取り組んだ。また、こうした具体的な設計手法を用い建築が「空間化」「建築化」され、結果として建築と社会が直接関わり合い社会的価値が確立されるという横文彦の設計論を引用し、本プロジェクトにおいてその実効性を検証した。

「ごちゃまぜ」理念に基づく建築は人と人の接点をいかにつなぐかが大きなテーマであり、モダニズム建築のテーゼである機能主義・合理主義を否定する反機能・反合理主義的側面を持つ。モダニズムの中で「ごちゃまぜ」をどのように解釈するかを本論の主要なテーマとして捉えていないが、R・ヴェンチューリが「建築の多様性と対立性」で述べた多義的で曖昧なものの価値を認めた建築であり、反モダニズム建築の系譜の中に位置づけられるといえる。

第一章では「ごちゃまぜ」理念が生まれてきた日本の福祉の課題および社会的背景について述べている。従来日本の福祉は行政の縦割りで進められてきたが、その背景には戦後

(氏名：西川英治 No 2)

の福祉関連法案が種別毎に定められ、福祉の効率化が図られてきた経緯がある。しかし、国連の活動など国際的な影響から、時代の経過とともに障がい者の人権に関する意識が高揚してきた。また日本は世界に類をみない超高齢社会を迎え、社会意識が変化してきた。こうした社会の変化が「ごちゃまぜ」を生み出した背景にあることを示した。

第二章では「ごちゃまぜ」という言葉に対する筆者の解釈を述べている。「障害があるなしに拘わらず、年齢差・男女差に拘わらずそこに住む人たちが関わり合いを持つことでひとりひとりが生きがいを持って生きる環境を創る」という考えが「ごちゃまぜ」の基本としてあるが定まった定義はない。「ごちゃまぜ」に通じる「ソーシャルインクルージョン」に対し厚労省は「すべての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるように社会の構成員として包み支えあう」との見解を示しているが、筆者はここでいう「包み支えあう」を制度としてではなく心の能動的な働きとして捉えること、即ち「人々が混ざり合うことで相互に関わり合い刺激し合う関係性を創り出し、今まで体験し得なかったような共感性を互いに呼び起こすことで、前向きに生きようとする心の様態を醸成する」ことが「ごちゃまぜ」の本質であり、設計の基本理念・計画目標であると考えている。それを建築空間として実現するための設計手法について論じているのが本論文である。

第三章、第四章、第五章は三つの建築プロジェクトに関する実践的研究をまとめている。第三章はShare 金沢の実践報告である。Share 金沢は金沢市郊外に建設された複合的施設群であり、児童福祉施設等の居住施設に加え温泉施設等多世代交流施設が外部空間と一体となって混在し、障がい者のみならず健常者も若者も高齢者も一緒に暮らせる街を形成している。建築主が求めていたのは「ひととひとの関係性を創る街」であり、街を全体から各部へ計画していくのではなく各部の積み重ねが全体を創るというC・アレクサンダーの「パターンランゲージ」の考えに筆者らは共感し、「場」を積み上げる作業からShare 金沢を創り上げた。

第四章はB's 行善寺の実践報告である。Share 金沢が多様なひとびとが集まり交流する街づくりであるのに対し、B's 行善寺はむしろ個の建築における「出会いの場」創りである。B's 行善寺は決して機能的な建築ではない。人と人が入り乱れてしまう動線計画である。しかし、そういった動線が逆に人と人を結びつけるという逆説的な計画論を生み出している。「遠くで見ると近くで見ると一換拶する一談笑する一活動を共にする」などのヒエラルキーに応じて「動線の複層化」「空間の透過性」「空間の相互貫入」等の「ごちゃまぜ」を促す設計手法が「さりげない出会いの場」を創ることにつながっていることを示した。

(氏名：西川英治 No 3)

第五章は輪島カブールの実践報告である。輪島は2007年能登半島地震に見舞われ多大な被害を受け、市内中心部において100軒弱の空き家が存在する等、街中の空洞化が進んでいる。ここでは「あるものを活かす」という基本コンセプトに基づいて既存の空き家を広く活用し、温泉を活用した多世代交流の拠点施設を核に、グループホーム・ウェルネス・ママカフェ等を街全体に配置することで高齢化が進んだ街中のコミュニティ再生を目指したものである。この事例では「ごちゃまぜ」を促す手法を、個々の建築と通りの関係性においても適用し、建築設計と地域再生プロジェクトを有機的・包括的に結びつけた設計方法の獲得につなげている。

第六章では三つのプロジェクトから導き出された建築設計論・設計方法論をまとめ、今後の展望について述べている。

最初に取り組んだShare 金沢で「ごちゃまぜ理念の模索・確認と街づくり」、それに続くB's 行善寺、輪島カブールでは「ごちゃまぜ理念の実現に向けた建築設計・地域再生プロジェクト」へと課題が深化しており、その実践のプロセスを明らかにした。ここでは、三つのプロジェクトの経験から「ごちゃまぜ」空間を生み出すには、人に対する差別のない愛情が醸し出す(「場の」空気)が基盤になること、それは主として運営者の姿勢と利用者が創り出すものであり、そのことを前提に上記の設計手法を駆使し初めて「ごちゃまぜ」空間が実現しえたこと、さらにこういった「ごちゃまぜ」を促す手法に加えて「あるものを活かす」という考えが運営者と共有した重要なコンセプトとなったことを示した。それは、Share 金沢においては豊かな自然環境・立地環境であり、敷地周囲に加えて中心部に残った緑の存在である。B's 行善寺では法人発祥の地である行善寺と緑・水の豊かな集落環境の存在がそれにあたる。輪島カブールにおいては朝市や輪島塗の漆産業の存在や中心市街地の落ち着いた住宅地の佇まいといった街の秩序そのものである。こうして事業ごとに地域固有の「あるもの」を「活かす」ことが事業の中心的な方針となり、建築と地域、過去と現在、未来をつなぐ設計方法の獲得にも結びついている。

「ごちゃまぜ」を促す設計手法、それに「あるものを活かす」という基本コンセプトは幅広い普遍性を持つと考えるが、地域の特性・アイデンティティにも応答する柔軟性、固有性をも内包している。いずれにおいても、社会的弱者も含めた多様な人びとが自然発生的に集まり交わる「場」創りが設計の中心課題であること、「場の空気」を創出し、相互に関わり合い刺激し合う関係性を創り出すことで、今まで体験し得なかったような共感性を互いに呼び起こし、前向きに生きようとする心の様態を醸成していることが明らかにできた。それが設計方法論の本質であり、固有の地域や人びとへの愛情が施設運営、建築設計、地域再生のすべての基底にあることが確認できた。

また横文彦の設計論を引用し本プロジェクトの様々な複層する事象を具体的に「空間化」「建築化」の作業にあてはめ、そうした過程を踏み完成した建築が地域社会に受け入れら

(氏名：西川英治 No 4)

れ「社会化」されている現状から、筆者らの「空間化」「建築化」の手法に正当性があることを検証した。こうした経過を経て、建築が「社会化」されることの重要性を認識した。

また建築の「理念」が具体的な「かたち」として深化するには、一般的には「理念の理解」があり、それが「理念を実現する手法」を導き出し最終的に「理念の空間化」につながると考えられるが、実際には「理念の実現手法」は順序を経て段階的に見いだされるものではなく「理念の理解」「理念の空間化」と同時並行的かつスパイラル的に思考が深化していく過程で認識され形成されるものであり、設計論の構築は実践知を体系的・論理的に再構成することでもあった。

今後、地域コミュニティ再生へ「ごちゃまぜ」理念に基づく設計手法を開示し、社会に広く伝えることを筆者の役割と考えている。

氏名	西川 英治		
論文題目	地域居住福祉施設群の建築設計に関する実践的研究 —ごちゃまぜ理念に基づく地域コミュニティ再生プロジェクト Share 金沢・B's 行善寺・輪島カプーレの事例から—		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	山崎 寿一
	副査	教授	遠藤 秀平
	副査	教授	末包 伸吾
	副査	准教授	槻橋 修
印			
要 旨			
<p>本研究は、障がい者福祉を中心とする包括的な地域再生プロジェクトに設計者として携わった経験を基に、その運営理念である「ごちゃまぜ」を建築的に勝算する手法を中心に設計論としてまとめたものである。</p> <p>この研究は、すでに、建築ジャーナルに建築作品が発表され、社会的にも高い評価を受けている石川県内に立地する Share 金沢・B's 行善寺・輪島カプーレの3つのプロジェクトを取り上げ、設計当事者がその実務経験から得られた知見(実践知)を、体系的・論理的に再構成し、建築設計の理論化に取り組んだ点に特徴がある。</p> <p>本論文は、申請者の「設計実務者としての学術論文」(実践的研究)に取り組む問題意識、モダニズム建築論における本研究の位置づけ・姿勢を明確にしたうえで、「地域居住福祉施設群の建築手法」について本論(三編6章)を展開している。</p> <p>第一編は、「ごちゃまぜ」理念の成立の社会的背景とその概念を整理している。</p> <p>第1章では、日本の福祉政策が戦後の福祉関連法の種別毎に縦割りで定められ、福祉の効率化を優先させてきた現状の課題をあげ、「ごちゃまぜ」の発想が生まれた社会的背景を述べている。そして近年の障がい者の人権に関する国際的な意識や超高齢社会に対する社会的な意識の変化を指摘し、障がい者と健常者の交流のみならず、地域社会全体の多主体・多世代交流を図る地域共生社会の実現を推進しようとする「地域コミュニティ再生プロジェクト」の位置づけを明確にしている。第2章では、「ごちゃまぜ」理念の成立・確立のプロセスを、建築主・施設運営者である社会福祉法人・佛子園(雄谷良成理事長)と設計者である五井建築研究所(代表 西川英治;申請者)の協働作業の分析から整理し、「ごちゃまぜ」理念の建築的解釈と、それを実現する建築的手法を確立した経緯が示されている。ここでは「人々が混ざり合う中で相互に関わり合い刺激し合う関係性を創り出し、それまで体験し得なかったような共感性を互いに呼び起こすことで、前向きに生きようとする心の様態を醸成すること」を「ごちゃまぜ」の本質と設計者が解釈し、「人と人の接点づくり、出会いがごちゃまぜを生み出す原点」と捉え「人びと相互の共感性を呼び起こす体験の場が空間であり、建築であり、場を積みあげる作業から建築・街を創る」という建築設計の進め方の基本方針に至った思考のプロセスが示されている。</p> <p>第二編は3つの建築プロジェクトの設計プロセスの分析を通じた実践的研究である。</p> <p>第3章では、金沢市郊外に建設された複合的施設群「Share 金沢」を取り上げ、設計者と建築主・運営者の打合せ記録や検討案の再評価を通じて、建物の象徴性や機能性・合理性といった従来の近代建築が重視してきた価値観を打ち破り、「ごちゃまぜ」理念が構築・確立されたプロセスが整理されている。Share 金沢では、児童福祉施設やサ高住等の福祉・居住施設に加え温泉、飲食、健康施設、共同売店等の多世代交流施設が外部空間と一体となって混在し、障がい者のみならず健常者も若者も高齢者も一緒に暮らせる街が形成されている。ここでは象徴空間の操作によって街を全体から各部へ計画していくのではなく、各部(場)の積み重ね、場と場の関係づけによって建築、近隣、地域へとつながる空間秩序を形成するという設計手法、空間構成と機能配置の手法が用いられている。個々の空間は全体の部分・単なる要素ではなく、個々の空間(場)の集積が全体と呼応するというボトムアップによる不連続統一的な空間構成手法、環境単位論とも理解できる。</p> <p>第4章は白山市の郊外に立地するB's 行善寺の実践的研究である。B's 行善寺は、Share 金沢が多様なひとびとが集まり交流する街づくり(建築群、地域スケール)に重点が置かれていたのに対して、むしろ</p>			

氏名	西川 英治
<p>個の建築における「出会いの場」の創出(場づくり)に重点が置かれた実践事例として取り上げられている。B's 行善寺では機能的な建築を否定し、ひととひとが入り乱れてしまう動線計画をあえて導入し、動線の交錯が逆にとひととひとを結びつけるという逆説的な効果を生み出している。空間構成、機能配置、建築設計において「動線の複層化」「空間の透過性」「空間の相互貫入」等の「ごちゃまぜ」を促す設計手法が用いられ、「さりげない出会いの場」の創出につなげている。</p> <p>第5章は、地域包括的な地域再生プロジェクトとしての輪島カプーレの実践的研究である。輪島は2007年能登半島地震に見舞われた被災地で、市内中心部には100軒弱の空き家が存在し、街中の空洞化が進んでいる。ここでは「あるものを活かす」という基本コンセプトに基づいて既存の空き家を広く活用し、温泉を活用した多世代交流の拠点施設を核に、グループホーム・ウェルネス・ママカフェ等を街全体に配置することで街中のコミュニティ再生につながる包括的なプロジェクトが実現している。またこのプロジェクトでは、震災後の被災住宅に住む単身高齢者の民家を買上げ、その民家は福祉施設に再生し、新たに建設したサ高住にこの高齢者が生涯居住することを保障するというシステムも導入されている。また輪島カプーレ開設後、施設運営のマネジメントにおいてもごちゃまぜの効果が表れている。ここでは「ごちゃまぜ」の手法を、個々の建築と通りの関係性や施設の配置計画においても適用し、建築設計と地域再生プロジェクトを有機的・包括的に結びつけた設計手法が獲得されている。また近隣の空き家や空き地の活用の相談が増え、新たなグループホームや民泊施設もオープンしており、地域コミュニティ再生の動きが増殖している。さらに建築設計と施設運営、地域が結びついた社会化に繋がっている。</p> <p>第三編の第6章(結論)では、三つのプロジェクトの実践、設計プロセスを理論として再構築し、地域居住福祉施設群の建築設計論、設計方法論をまとめている。</p> <p>最初に取り組んだShare 金沢で「ごちゃまぜ理念の模索・確認と街づくり」、それに続くB's 行善寺では「ごちゃまぜ理念の実現に向けた建築設計手法」、輪島カプーレでは「建築設計、横断的施設群の計画、地域再生へと繋がる地域包括的な計画・設計手法」へと深化している。また本研究は、一貫して、社会的弱者も含めた多様な人びとが自然発生的に集まり交わる「場」創りが設計の中心課題であること、「ごちゃまぜ」空間を生み出すには、人に対する差別のない愛情が醸し出す「(場の)空気」が基盤になること、それは主として運営者の姿勢と利用者が創り出すものであり、そのことを前提に上記の設計手法を駆使し初めて「ごちゃまぜ」空間が実現しえたこと、さらにこういった「ごちゃまぜ」を促す手法に加えて「あるものを活かす」という考えが運営者と共有した重要なコンセプトとなったことが論じられている。そして「場の空気」を創出し、相互に関わり合い刺激し合う関係性を創り出すことで、今まで体験し得なかったような共感性を互いに呼び起こし、前向きに生きようとする心の様態を醸成していることの重要性が論じられている。その点に設計方法論の本質があり、固有の地域や人びとへの愛情が施設運営、建築設計、地域再生のすべての基底にあることが論証されている。</p> <p>本論文では、最後に建築家・横文彦の設計論を引用し、本プロジェクトの様々な複層的な事象を具体的に「空間化」「建築化」の作業にあてはめ、そうした過程を踏み完成した建築が地域社会に受け入れられ「社会化」されている設計プロセスを整理し、筆者らの「空間化」「建築化」の手法、さらにこうした経過を経て、建築が「社会化」されるという設計の全体像を明らかにしている。また菊竹清訓のか・かた・かたち論を引用し、建築設計の実務に基づく実践的研究の性格について、「理念」が具体的な「かたち」として深化するには、一般的には「理念の理解」があり、それが「理念を実現する手法」を導き出し、最終的に「理念の空間化」につながると思われがちであるが、設計の実務では「理念の実現手法」は順序を経て段階的に形成されていったものではなく「理念の理解」「理念の空間化」と同時並行的かつスパイラル的に思考が深化していく過程であるという自説を紹介し、本研究における設計論の構築は、実践知を体系的・論理的に再構成することでもあったと結んでいる。</p> <p>本研究は、建築単体の設計論ではない。設計理念・計画目標である「ごちゃまぜ」理念は建築単体では実現できるものではなく、個々の建築が「群建築」として地域社会の中に存在し、「単体建築—建築群—地域社会」と個々に積み上げられた要素の集合体として各スケールのプロジェクトが成り立っていること、このプロジェクトが福祉・居住施設と交流施設・外部環境を群建築として一体的・包括的に捉え、建築設計と施設運営の共有理念のもとで実現した地域再生プロジェクトであることを論じており、「ごちゃまぜ」理念(価値観・規範・当為)の実現という明確な計画目標をもつ「地域・居住・福祉・施設群」の地域包括的・挑戦的な設計論を展開したといえ、設計・計画分野の実践的研究として学術的な意義がある。</p> <p>本研究は地域居住福祉施設群について、その建築手法を研究したものであり、実践に基づく設計方法論について重要な知見を得たものとして価値ある集積である。提出された論文は工学研究科学学位論文評価基準を満たしており、学位申請者の西川英治は、博士(工学)の学位を得る資格があると認める。</p>	